

木下杢太郎(太田正雄)「欧米日記」の成立

—— 文学者の留学日記 大正篇二 ——

福 田 秀 一

一

木下杢太郎こと太田正雄⁽¹⁾は、大正十年五月から十三年九月まで、アメリカ・ヨーロッパに留学した。その期間の日記と称するものが、『木下杢太郎日記第二卷』(岩波書店・一九八〇、以下この刊行本を指すときは二重カギをつけて『日記』と記す)に「欧米日記一〜四」として収めてあり、その間の彼の動静と思考・観察等は、「諏訪丸にて」「クウバ紀行」「倫敦通信」以下大小四十余篇の紀行や回想・報告(その多くは『其国其俗記』『えすばにあ・ぼるつがる記』に収め、それらに収めなかったものを含めて、今では一九八〇年代の新版『木下杢太郎全集』第十一〜十四巻で容易に見得る。以下彼の全集はもっぱらこの版による)や書簡(同『全集』第二十三巻)それに画集(『木下杢太郎画集』第二卷紀行篇)とともにこの「日記」によって、ある程度知ることができる。事実川口朗氏の一連の報告は、「この日記を軸とし、右の紀行、随

筆、書簡を参照しつつ杢太郎のアメリカ・ヨーロッパにおける足跡を日をおってたどることを試み」ている。

ところでこの「欧米日記」は、杢太郎が実際に留学中に船内や彼地で記したものであろうか。筆者の調査によれば、日によっては確かにその折の記であり、また「欧米日記四」として『日記』に収められたものもそうであるが、「欧米日記一〜三」は帰国後、当時のメモや書簡などを資料として、かなり後にまとめられたものである。ここでは先ず、そのことを具体的に指摘する。なお「欧米日記」というタイトルが『日記』刊行に際して付されたものであることは、新田義之氏の「後記」からも読み取れるところであり、角括弧で囲んだのも、原文にない記述を編者などが補ったときの習慣に従ったものと見られる。

二

「欧米日記」の一〜三が後年のまとめに成ることは、活字公刊された

本文や「後記」と題する新田氏の解説を少し注意深く読めば容易に推察されるところかと思うが、やや詳述するために「欧米日記二」に関する「後記」を引用して番号を付した傍線を施し、神奈川県立近代文学館所蔵の原本に当って知り得た現状に関する補足その他を述べる。

その「一」について、「後記」には次のようにある。なお、以下に述べるように「二」「三」についても事態はほとんど同様である。

「欧米日記一 大正十年」は、その大部分が「M. OTA」と刷り込まれた私製原稿用紙にメモ風に細字で書かれており、「²仙台皮膚科教室」³用箋も若干ではあるが用いられている。筆者が欧米旅行中に現地でホテル客用箋などに書いたメモ類が、該当する日付の個所に貼られている場合も多い。⁴六月七日の分だけは文房堂製原稿用紙に書いて、前記の私製原稿用紙の上に貼りつけてある。⁵全部を揃えて改造社より太田正雄宛の封筒に入れ、表に「1921」と算用数字で記す。内容は「大正十年五月二十七日より十二月二十五日までで、さきの「大正十年日記」と重複するが、著者自身の手によってこの形に整理されているので、原本の姿を保存した。⁶重複部分で「大正十年日記」の記述と数日にわたって日付が一日ずつ食い違っている箇所があるが、そのままにした。

先ず傍線部 6 の点について述べる。『日記』で「欧米日記一」の前に収めてある「大正十年日記」は、「後記」に言う通りノートに記され、日によって毛筆（初めの方少し）・鉛筆・ペン（インキは青または青黒）とまちまちで、疑もなくその日その日の記であり、文体も、例えば旅立

ちの前後は（以下改行しての引用では、縦書・横書は底本のままとするが、漢字の字体は改めたものがある）

26. Mai⁽⁴⁾

午前。

10, 東京 Station—古宇田—新橋—桜木町—仏国領事館—伊太利…

—水上警察署—Templaya—風月堂—郵船—コーモリ傘—帰宅。

（中略）

27. Mai. 雨

9 時ヨリ森博士、佐々木信彌、

会フ：河本、林、

病院

会ハス、竹内、近藤、

大勢来ル、

（後略）

のごとくで、その年の最後（十二・26、以下、月日をこのように略記する）近くには

25. 日

ひる Madeleine にて Messe をみる。

ひるめし、

Monsieur Kojima の家にて話す、

六時半 M. Hosumi の家と呼ばれ、十二時帰宅

とあって、全く自分の備忘のためであると言える。しかもこの間省かれ

た日はほとんどなく、そのような日も日付だけは記されているが、「欧米日記一」には日付も飛んだ箇所がかなりあり、その最後の十二・25の記は

le 25 Dec. 1921

Noël

Madeleine

とのみ、それも後日の筆跡で、「後記」に言う通り左下欄外に「M. OTA」と印刷してある B 5 縦長二百字詰（本来は横長にして横書用か）の原稿用紙に（前日の記事とは用紙を改めて——後述するように「欧米日記」ではほとんど毎日用紙を改めている）記してあるという有様で、「欧米日記一」には後日の筆になる部分のあることが知られる。

今も言及し、傍線部 1～4 から判るように、「欧米日記一」は、一日分を一枚あるいは二枚以上の原稿用紙等に貼付または記入して、綴じないままばらばらの形でページ数も付さず、5 に言うように大型封筒（であったもの）に入れてある。このことは「二」「三」も同様であるが、その封筒は現在では三方が切られて仮表紙状になっている。そしてその左下枠外に（14.7.1m）と印刷してある。これは大正または昭和十四年七月に改造社が一千部刷らせたの意と思われるが、宛名の住所が「西片町一〇はノ三」とあることから、昭和十四年製作の封筒と判る。なおその封筒の表には、横書の「1921」と並べて横書で「大正十年（注、この四字を楕円形で囲む）／①」（改行を斜線で示す、以下同じ）

ともあり、これはその封筒の中身がその年の記であるとともに、留学時の日記の一つ目である旨の覚えである。「欧米日記二」を入れた「文芸春秋社より太田正雄（注、これも住所は西片町一〇はノ三号）宛の封筒」の三方を切ったものの表には「1922」の下に「②」、「同三」を包む（「文芸春秋社より太田正雄宛の封筒」ではなく、黄色の馬糞紙を二つ折にして仮表紙とし、更にそれに大型厚地茶封筒を切って折ったものを被せてカバーとしている）仮表紙とそのカバーのうち、カバー（これは「一」「二」と同様に右開け）の中央には「戦後（注、第一次大戦後の意）の満洲」、右上には「Mai-Juin/1932」と鉛筆で書いて、全体を多数の斜線で抹消してあり、上方に「1923」、下方に「1924」と各横書で書いた他、左下方に③と鉛筆で記してある。一方、馬糞紙の仮表紙（これは左開けの向きに当てられている）には、鉛筆で「l'amerique et/ l'Europe/ vecu/ par/ Pontan (= America and Europe experienced by Pontan, 大文字小文字は原文のまま）と記されている。馬糞紙に記した鉛筆書は意味から考えると「欧米日記」全体のタイトルと見られる⁵⁾。

最後の点はしばらく措き（注 5 に譲る）、「欧米日記一」「三」が右のような仮表紙に包まれていることは、この各一年分の記をこれらの封筒に入れて整理したのが昭和十四年ないしそれ以後であることを示すだけで、内容の時点を示すものとは言えないが、用紙・筆跡それにインクの色などから見ると、記事の執筆時点には次の四種類が認められ、A、C は通例後述するどれかの原稿用紙に貼付してある。以下、その場合には「台紙」の語を用いることがある。

A その日の記と認められるもの（一兩日後の記であることは問わない。次も同じ）

B その日にレストランのメニューや劇場のプログラムなどに書きつけたと認められるもの

C その日の書信と認められるもの

D 後日の記（メモあるいは記憶から）と認められるもの

「欧米日記二」の冒頭部分で例示すれば、「アメリカ」の一行は D（前述の「M. OTA」の原稿用紙の中央に鉛筆書）、五・27と六・7は A（文房堂の B 6 縦長二百字詰原稿用紙にそれぞれペン書・鉛筆書）、六・9 の本文は C、同日の前書二行と括弧部分¹⁷ 14 は日付を含めて D、六・15 は日付（右上欄外に加筆）を除き C である。最後の十五日はほぼ B 6 の白紙二枚にペン書で、中央に横に折り目（谷折り）跡があり、末尾の日付・宛名等からも、角封に入れて正子夫人に送った書信を後日回収してここに入れたものであること、明白である。六・16（「十六日」の「六」は「九」を抹消して右に「六」としている）から七・16 まではすべて D であるが、特に六・25、26 には『日記』に採らなかった抹消記事がある。25 では①公刊部分（三三四ページ末行）の次に「廿五日。大学。病院」と書いて縦二本線で抹消し、その下方に「二九」とある。26 には三つあって、一つは②日付「廿六日」の右に「朝シカゴ発」、第二は③末行「この夜」の上に「廿九日」と書いて抹消、もう一つは④末尾「ボストンに着。」の次に「昨日古宇田君と別る。（紐育にて再び会すべし）」というのである。①と④は 28、②は

25 の記事と重複もしくは矛盾し、恐らく訂正の方が正しく、これらもこの日々の記事が D（後日の記）であることの証と言えよう。

B に該当するものは多くはないが、「欧米日記二」では七・21 にそれがある。この日の記事そのものは Hotel Brevoort の用箋の表裏（裏面は最後の二行）に書き「M. OTA」の原稿用紙に貼られているが、その前に HOTEL/HALANA/PLAZA/F. Mestre & Co. とある小紙片に le 21 Juillet と横書したものを貼り、全体の右上に「七月二十二日」と書いて（これは D）最後の「二」を「一」と重ね書きしている。「欧米日記二」の一・19 と 20 との間にも、記事は無い（だから『日記』に省いたであろう）が RESTAURANT MARGUERY の DÉJEUNER du 19 Janvier 1922 のメニュー（ほぼ B 4 の厚紙に印刷、四つ折の跡あり、今は横二つ折となっている）が挿入されており、このように無記入の用紙を『日記』が公刊に際して省いたものは他にもある。

三

以上によって「欧米日記」の一―三が後日のまとめになることは明白であるが、それではそれはいつ頃の編か。結論を先に言えば、それは空太郎の東大在任中、昭和十年代の中葉かと思われる。

その理由の第一は、前引「後記」の傍線部 1・2 に言及された「M. OTA」や「仙台皮膚科教室」の原稿用紙の形状である。空太郎がこの専用紙をどこで印刷させたのかは判らないが、かなり薄地の洋紙（いわゆるザラ紙）の紙質と赤褐色の野の色や全体の感じが、筆者の記憶す

る（それは昭和十年代後半から三十年頃までのことである）父の用いていたもの——昭和二十年代の半ばには、ある用途で希望した筆者のために、父はこの紙質と罫の色との用紙を数千枚刷らせてくれたが、印刷所の名は聞き漏らした——と、極めてよく一致するのである。加えて言えば、その罫の色（稀に緑のものもある）や濃さとして「M. OTA」の字体も「欧米日記一―三」を通じて一様ではなく、恐らく複数回の印刷になるものと思われる。すなわち少なくとも「M. OTA」の原稿用紙は、昭和十―二十年代の東大医学部教官たちがしばしば用命した印刷所の製作に違いなく、このような用紙に書かれた記事は、李太郎の東大転任後、恐らくは晩年に近い時期の筆であろうと思うのである。ただ、前引「後記」の傍線部2に言う「仙台皮膚科教室」の用箋——これは「欧米日記二」（以下多く「二」のように略称する）には見当らず、「二」に一枚（九・15の第一段落を貼る）見出したが、やはり二百字詰原稿用紙で、本来は横書用のものを縦長として台紙にしている。そこに貼付された記事（ほぼA6判の白紙に書く）自体は当時現地（ベルリン）での記と認められる——は恐らく仙台在任中に刷らせたものの残りであろう（この一枚だけが仙台時代の貼付であるとは、到底考えられない）。

「二―三」が後日の編であるもつと決定的な証拠は、「二」の台紙の中に昭和十五年夏に書いた文章の下書が混っていることである。すなわちその九・17（『日記』三八五頁）、18（二条ある中の長文の方）、20その他かなりの日の記事（前記分類A）の用紙は「松屋製」とあるB5横長四百字詰原稿用紙（それを台紙の幅に応じて切ったもの）で、この用

紙は前述の文房堂原稿用紙とともに外遊に携行したものと思われる。そしてその台紙（この辺もすべて「M. OTA」の原稿用紙）の大部分には映画「小島の春」（昭和十五年七月封切）の批評の下書と見られるものが書かれているのである。この批評は『日本医事新報』第九三五号（昭一五・八）に発表されたものの由で、『全集』第十七卷に「映画「小島の春」（この「映画」はもちろん「映画」の意で、これは当時評判の名作）」と題して収められ、同巻「後記」の解説に要点は尽されているが、李太郎がこの文を書いたのは同年七月二十六日から八月三日までの間と判る。また九・14（二条ある中の長文の方）の台紙には『鈴木三重吉全集』の刊行（岩波書店・昭和十三年）に寄せた文の書き出しとおぼしきものが書かれている。これは実際には世に出なかったもののようであり（『全集』第十六巻に収める「鈴木三重吉全集」なる文とは、書かれた時期が異なると見られる）、また九・13（これも二条の中の長文の方）の記事（これも「松屋製」原稿用紙に書く）の台紙五枚に書かれた文の出版は未調であるが、いずれにしても彼は、不要になったそれらの下書を、右の日々の記の台紙に転用したのである。これは「欧米日記」編集の大凡の時期を示すものと思われる。

なお、「ゲエテの伊太利亜紀行」（『全集』第十四巻、初出は昭七・三の『藝林間歩』第十三号へゲエテ百年祭記念の由）に「僕がエネチヤで偶然ゲエテの止つたと同じ宿へ落ち付いた時の事を、日記から抄して見よう」（用字原文のまま）と前置きして、

「あたりがとぼとぼになる頃やつと宿屋の多い街区に出た。（中

略）舟の已に過ぎた Alberto Vittoria と云ふ家の（中略）有るに氣付き、舟をその家まで返させ、今夜はその客になることに定めた。（中略）翌日その軒に、千七百八十六年の 幾月の幾日から幾月の幾日までゲエテがここに宿したといふ文句が、独逸語で記されているのに氣附いた。」

という全集本で七行の引用があるが、現在の『日記』ではヴェネツィア滞在中の大正十二年四月四～八日は連日、後日記したと見られる（前掲分類の D）「エネチャ」もしくは「エネチャ滞在」の一行（「M. OTA」の用箋に一日一枚に）のみで、右のような長文の記事は見当らない。その上、右の引用で「舟をその家まで」の部分、その晩泊っている家を「その家」と言うのは舟（ゴンドラと思われる）に乗っていた時点現在の記述として容認するにしても、その後も「その家」と書くのはやや落ち着かない。あるいはそれもその文の勢いから「この家」と切り替えにくかったと見るにしても、最後の文に「翌日」とあるのが投宿した日の記でないことは明らかで、この文章全体が当時の日記そのままでないことは言うまでもない。一つの推測は、これを書いたときには当時の日記が手元にあつて、この文章はその中から投宿した日とその翌日の記事を一つに併せて引用し、その際「その客」とか「その軒」とかの語句を加筆したか改めたかしたと見ることであるが、筆者はむしろ当時の日記なるものは無く（何かのメモはあつたかも知れないが）、前引の「日記から抄して見よう」というのは創作であろうと考える。もしここで利用した当時の日記が存したならば『日記』原稿の編集時点で活用

されたに違いなく、前述のような地名のみの一行（それは後日その日の記を復元するための覚えであったと思う）で済ますとは考えられないからである。

さて前掲の A～D のうち、A～C と D との意味的相違は大きい。『日記』の本質から言う、B は A（本来の日記）に準じ得て（手元に適当な用紙が無かったための代用と考えられるし、見分けることも容易である）、C はそれと一線を画すべきであるにしても、内容的にはその折の観察・思考の記録として、A・B の延長と見ることができ⁽⁸⁾のに対して、D は編集時の加筆で、その読解には一応の配慮を要するからである（尤も、以下に記すようにそこには実質的な記事内容は多くない）。この両者の区別は原本に当れば一目瞭然であるが、一般の読者にはそれが困難であるから、煩わしいようではあるが、以下に D の部分を指摘して、その区別を明らかにする。なお、これらの日々は通例「M. OTA」の原稿用紙に直書で、左にその状況を用紙ごとに読点で区切つて示す。

「欧米日記」タイトル、六・9～10・13、11、14、12、16・17、19～22、23～26、28、七・4、5、6、7、12、14（「十」は「廿」の右に訂正）、15、16・20、29（図は二枚目。この図はもともと妻宛七・16 書簡一八三に記してあつたのを転写したものとと思われる）、八・1、3、10、14・15、「大西洋／英国」、九・2、13（「廿一」の「一」を「三」と直し、更に全体を抹消して右に「十三」と書く）、22、27、十・18、25、「仏蘭西」、十・26、30、31、

十一・1、1・2、3・4の主文、4〔「手帖より」の四行〕、8、10、無記日、27、十二・11、15、19、20、22、25
〔欧米日記二〕一・6、19、21・22、23・25、26（日記体の方）・27、28・30、31、二・25、26、三・1、9、24（書簡二〇〇参照）、四・22、24、27・29、五月の全部（一日ごとに用紙を改める）、六・1、2、11、26、27・29、七・16・18、八月の全部（同前）、九・13（第二）、14（初めの日付・標題）、16末行とスケッチ、17〔「手帖」、18（第二）・19、21・22、24・23、十・13、十一・7、十二・4、6

〔欧米日記三〕一・5から三・29までの各日（すべて一日一枚）、三・30から四・16まで（同前）、七・16・23、八・3、6、十二・24、28・29、〔1924〕一・1・3、4・5、14、29、二・1・4、14・16、〔二月〕三・19、五・8、22（二条）、25、27、28、29

因みに「欧米日記四」は、「後記」に言う通り一冊の五ミリ方眼ノート（A5ではなく菊判、表紙は赤茶で上方にSELECTAと横書、左つまりノド寄りに針葉樹の小枝のペン画を印刷）に横書で記され、表紙文字の他は当時の日々の記であること、明白である。一頁に一日を当てるつもりだったと見え、しばしば空白の頁が存する。また一日から六日の前半まで（二日は記入なし）は鉛筆で抹消してあるが、これは「欧米日記三」に清書・転記してしまったからであろうと思われる。例えば一日（元日）の条は

Le 1 Janv. 1924

正宗、日本人倶楽部。

ゾウ煮ヲ食フ

池内氏

上田氏（海軍）

とあり、これが「欧米日記三」に

一月一日 1924

午、正宗と日本人倶楽部。ぞう煮を食ふ。池内氏、海軍の上田氏。となつてゐるのである。

また「欧米日記四」に関して「後記」には、右のノートと「別に「四月巴里」と題して同年（注、大正十三年）四月九日から十三日までを記したA5判升目ノートがあり、また②松屋製原稿用紙に書いた五月三十一日より六月三日に至るかなり長文の日録が「Espagne Madrid」と表書した封筒に入れてある」（①②の番号は今付した）とあるが、この①②は現在所在不明の由で、出納されない。ただ、①は今見る「四」と同じようなノートに書かれているようで当時の記（前記分類のA）と思われる、②も用紙から言つてそうであるに違いない。目下のところ『日記』に印刷された形でしか読めないが、文章体で意味がとれて実質的な部分が多いのは喜ばしい。

以上に具体的に見たように「欧米日記」の一―三は後年の編にかかり、記事には前掲のA・Dの四種類が混在している。そしてその内容

には、繰返す通り携行したと見られる原稿用紙に当日記したものとや当時ホテルのメモ用紙や劇場のプログラムの余白などに記したのをそのまま台紙に貼りつけたもの、妻や友人などに宛てた書簡をそのまま貼りつけたり転記したりしたもの、後日メモや記憶から文を成したものなど、さまざまな段階があり、全体として留学時の日記と見るのは無理である。それと逆に、「留学」とも「欧米」とも題していないが「大正十年日記」の五月二十六日（その前にVoyageの見出しがある）から後は、「留学日記」と見るべきである。

すなわち「欧米日記」については、その「四」は確かに当時の日記であり、一・三のA・Bも一応そう見てよい。Cは「日記」そのものではないが、今までの他の留学者の日記についてしてきたように、その時点での観察・感想の報告として補助的に取り上げることが可能であろう。Dは扱いに注意を要するが、実際には例えば「三」の一・三月や三・31・四・16のように毎日一行程度、滞在地を記したのみで、他との区別が容易なものも多く、「一」「二」にはやや詳しいものもあるが、その場合大抵はそれなりの資料や確かな記憶があったものと思われる、少し後れて推敲したものとも考えられることもできない。要するにこの「欧米日記」は、「三」のイタリア滞在中のような明らかに後年の加筆と見られる部分を除外し、家族や知人に宛てた書状の部分を見分け、やや詳しい報告や感想のある実質的な記事にウエイトを置いて読むならば、留学日記の一つに数え入れてよいであろう。今回は残る紙数も少ないが、次の機会を含めて筆者は、そうした立場でこの一連の日記を取り上

げることにする。その際「欧米日記一・三」については、引用の末尾に前掲のA・Dの区別を付記する。

四

現存する『日記』には、留学の準備のことはあまり記されていない。中で「大正十年日記」の一・13に「（前略）日本郵船にゆく。加茂丸五月三日神戸発にきまり」（原文横書、次引用参照。この日神戸の実家に居る妻に宛てた書簡一五八にもこの旨を報じているが、実際の出発は五・27諏訪丸で横浜からであった）、四・6に「日本郵便（注、「郵船」の誤記と見られる）——銀行——古宇田君。（中略）洋服を誂へる。シャツ、カバン等を買ふ」（原文横書、句読点はピリオド・コンマ、以下縦書に改めた引用はこれに準ずる）とあるのは準備の一環と思われる、また四・21・五・21の部分（「予定」欄を使つて各日一行程度、無記入の日もある）に

大（中略）夜士肥先生ヲ訪ル。

とあるのが旅立ちの御挨拶と思われる。そしてその「予定」欄転用の最後から二目目に

中 郵船出張所ニヤギン・田中、郵船に朝賀氏及永島氏ヲ訪とある位である。私費留学だったためもあつてか、派手な壮行会などはなかったらしい。

Voyageと題して始まる留学日記の冒頭、五・26の前半は前節に例示

したが、何かの手續でフランス・イタリアの各領事館に寄つたらしいことが判る⁽¹¹⁾。右に(中略)としたその日の後半も同じスタイルで、Autoと前置して二十ばかりの人名(最初だけ「御殿町」と地名。これは次兄円三宅⁽¹²⁾で、いつもこう記している)を列挙し、木村莊八・長田幹彦・長田秀雄(幹彦の兄)などの名も見えるのは、車(ハイヤーか)で出発の挨拶をして回つた先であろう。行を変えて、「龍美太夫、美能治、…おかつ、梅吉」とあるのは、馴染の芸妓連であろうか。

翌日の記事も前半は前に引いたが、森(鷗外)・佐佐木両博士へは出向いて、他の人々には自宅(注12にも一言したように、当時彼は神田三崎町の岳父河合浩藏宅に寄寓していた)もしくは病院(東大本郷)で応対したとの意であろう。この日のうちに横浜へ出て諏訪丸に乗船したらしく、後半には先ず「見送人」(注、東京駅へ)として「土肥博士、夫人、永井博士⁽¹³⁾、常盤博士⁽¹⁴⁾、関野博士⁽¹⁵⁾」と恩師筋などを挙げ、次いで「皮膚科」「親ルイ」「人」(他のどれにも属さぬ知人の意か)「文芸」「医」(注1に挙げた「颯田」のみ)「女」の区分を設けて、それぞれ何人かの名を記しているが、「文芸」の「石井」(柏亭であろう)「長田」(前出二人のどちらか)「鈴木三重吉」「津田青楓」「与さの、夫人」(「木下全太郎宛知友書簡集」二六七の五・26寛書状参照)「和辻」⁽¹⁶⁾などが、「女」の「茅野夫人」(注、雅子)とともに注目される。

そしてこの日のこの後の記事は、

Thé

Dinner

雨の日の解款—Sotoni—american Conquest

ein Engländer u. seine Frau (= an Englishman and his wife)

夜 avec Comte Ôani, Bouget de Md. Yosano et Khimimaton.

と仏・英・和・独文を混えて書いている(これは留学時のみならず全太郎の日記の特徴である)が、その初めの二行はその日の茶と夕食はすでに船上でとつたことを示し、三行目はよく解らないが次行は船中で英国人の一夫婦を見た旨のメモ、末行は夜大谷光瑞氏と話をした⁽¹⁷⁾、与謝野夫人(晶子)とキミマツ氏(「欧米日記」)の冒頭に言う「古宇田君の知つた美しい人」であろう)と連名の花束を前にしている、の意であろう(後引参照)。

これ以後六月九日のヴァンクーヴァー入港まで⁽¹⁸⁾、「太正十年日記」には右に例示したようなメモ風の記事が多い(五・7、8は日付・記事なし)中で、「夜ハ聊齋ヲ訳ス」(五・30、原文横書、「午前中昼ね、午后来又ひるね。／後支那伝説集の序を書く」(六・1、同)などは辛うじて伝記的に注意される⁽¹⁹⁾が、やや面白いのは次の二条である。

一つは六・4(この日はかなり長文。但し後半は見たものを仏文で書いてみたという程度のもの)の初めの方に、

今日も濃霧で簾々霧笛を鳴らします。それは極めておほいかな
往々 bas で be . . au . . au . . au (注、ここはフランス語の beau
を延ばして訓む) — bon と響きます。それに機関の二拍、
午前中 Karavan の Record (Victor) をやつた面白かつた。⁽²⁰⁾

又 A street of Cairo (Columbia) といふのに同じ mélodie があつた。

さう云ふ機縁で午後は大田黒氏の洋楽夜話を二回読んだ。
夜は韓田氏と西洋の Architectur のことを話した。

またその前老人が尋ねて来て、北海道 Oak のことなどを話した。
夜また其話が出て、Belgique では Oak の斑を喜ばない。英人は之を好むといふやうな通を云ふ人もあつた。

20 年間 Oak ヲ枯ラス話ヲシタ。

とある（この次に、注 17 にふれた大谷氏不機嫌の条が来る）ものゝ、その前半は空太郎が音や音楽に敏感であつたことを示し、その詩人としての資質を思わせる点がある。後半の Oak ニタには彼のもう一面として知られる植物（特にその観察）への関心が見え、そうした関心は当時の自然科学者には決して珍しくないが、この日記の六・九に見える次の条を併せ見ると、彼のその方面への関心は一際強いことが知られる。右にやや面白と言つたもう一つは、これである。

すなわちその日、ヴァンクーヴァー投錨の直前の記事の中に、

Victoria ノ岬見ユ、山長ク、且ソノ立木ハ針葉樹掩ヒ隠リテ極メテ特殊ノ景観ヲナス、日本ノ松ガ特長ナルガ如ク、ソレヲノ Bäume (= trees) ガ此 Land ノ特徴ヲナス也。

と、スケッチを添えて書いてゐる。そして少し他の話題を記し、「投錨、(Quater Williams Head) 6²⁵ p.m.」(横書)とあつて次々行以下に

主ナル樹ハ二種

- 1) Fir (Canada), Fir Douglas, Oregon pine (Portland)
- 2) Spruce Hemlock

遠クヨリハ黄色ノ花見ユ、時ニ誤リテ名ハコシ Scotch broom トイフ、花ハ、ユニシダニ近キモノ也、
上陸ス、年増女の薬ハガキ売立ツクス、(漢口ヤ神戸デ…イハル女也)

drive

紅色花多シ: Horse stone

黄色花 scotch broom Douglas (第一ノ提督) Scotland ヲリ移ス也ト、

大萱開、

街路イヤヤ豫ニ似タル、Horse Chest Nut

郊外樹多キ處、Maple, Oak, Pine et Spruce 街路ヨロシ、

とある。そのほとんどの観察と記録もそれである。⁽²¹⁾六・27(パリの条)にも、「桐花ニ似」た樹のスケッチ入りメモがある。

五

出発に際して携帯した「大正十年日記」のノートに日々に記した航海記は右のようにメモ的であるが、この期間の「欧米日記一」はどうかと言つと、その冒頭は川口氏(注 3 所掲の 3)も引用しておられるが、

五月廿七日(この日付は右下隅に記されている。次の六・7も同じ)

暴風の如く(注、原文は一字下げで始まる)、忙しい日が四五日続いて、今日いよいよ出立の日となつた。朝から雨である。先輩知人、友人、親しき人々、女、さういふ見送人を車窓から見ても、已

に旅に慣れた私は心を動かすことが少かった。(古宇田君の知った美しい人が僕にも大きな花束を配ってくれて晴れがましかつた。)夜は大谷光瑞氏と語った。沢山の仕事が東京にやり残されたことを感じて、腹立たしき心である。

ボーイが戸をしめあるく。やめよう。(A)

と、観想的、やや感傷的な文章である。これは前述の通り文房堂の原稿用紙にペンの走り書きで、当時の筆と認められるから、それまでの備忘的なスタイルの「大正十年日記」と別に後日の公表を意図して、当日もしくは一兩日の後に船内で記したものと思われる。

しかしその後十日余りの太平洋航海中(六・7まで)は記事なく、ヴァンクーヴァー上陸(六・9)、シアトル到着(同日か)からサン・フランシスコ、ロス・アンゼルスと辿った日々の記は、前述のように妻その他に宛てた書簡やメモによって後日書いたりそれを貼りつけたりしたもので、そのことは「欧米日記一」の六・12の条

六月十二日 桑港。Hotel St. Francisco

バスルームある二人の部屋。\$12。前が小さきパイク、五階也。

Bank of Italy, Theater Orpheum のある繁華街を見る。電車と自動車とたへず往来、ロズベリイといふ莓

夜八時領事をたづねたが、日曜の夜で不在。(この次、原文では二行空けてある)

同日 午後一時廿五分ポオトランド以南約四時間の汽車中 シヤトル——桑港間は約二昼夜、(D)

とその日に妻宛に書いたやや長文の次の二通の書簡との間にも見られる。

すなわち第一は、

六月十二日午後一時二十五分ポオトランド以南約四時間の汽車ノ中ニ於テ

シヤトル、桑港間は略二昼夜かかる。(後略)

と始まるもの(この後には「亜米利加」の食物の分量や料理法からアメリカ人の食べ方更には「執務振り」が「丁度活動写真に出て来る通りで、いかにもいそがしさう」なこと、それに車窓に見る田園風景や針葉樹のことなど詳しく記され、内容的には甚だ面白い)、もう一通はその晩前記のホテルで認めたもので、

十一時半、今御湯に入つて上つた所で、大変つかれてゐるから、もう今夜は手紙はかかぬ。この市第一の Hotel で Bathroom のある二人の部屋をもつたら \$12 だ。高いことは高いが中々上等の部屋だ。但し八階で前が通り(小さい Park になつてゐる)だから三崎町の如く電車がひびく、さつき一人で Bank of Italy, Theater Orpheum 等のある最も繁華な通りを通つたが、電車と、絶へず往来する自動車との為で、街道を横に踏み切るのが頗る困難だ。(中略)今日は Roseberry といふ莓をたべた。草莓に似たものだったが、種子が頗る堅かつた。八時頃 Consul を訪ねたが、日曜の夜で No. 29 Buttery Street にある Consulate は閉してあつた。明朝訪ねて見るつもりだ。(後略)

というものであるが、「欧米日記」の当日の条は、例えば「ロズベリイといふ莓」の一行など、これらの書簡に助けられないと十分理解できず、総じてこの「欧米日記」は未完成で、他日の推敲を期待していたものと見ざるを得ない。やや改まって書き出したつもりの冒頭（五・27、前引）の、あまり長くない一日の条に一人称で「私」と「僕」とが混在しているのもそうである。

以後の彼の足跡は、川口氏（注3所掲論攷1・2）が旧版の『全集』によって他の「紀行、随筆、書簡を参照しつつ」精細に摘記され、またその米欧での所感と発言ならびにその留学の意義等については、杉山二郎氏『木下空太郎』（注10所掲）の第八章「西欧ユマニテとの出会い」に考察されて「基本的には仄されていると見られる」（川口氏前記論攷1注4）ので、今回は残る紙数で「大正十年日記」を最後まで見て行きたい。

この「日記」は前述の通りほとんど備忘的なスタイルで、内容的にも特に注目すべき記事は少ないが、日々の行動や観察を細かく記そうとする姿勢は注意される。例えば六・15の

○10時朝飯、ソレハツヅキノ Restaurant (昨午ノ如) ニテ又 Strawberry, Cafee, Sausage & Egg Waffle ニテ 90¢ 許. (中略)

○11:15 発車, Sleeping, 3時コロヨリ 7時マデ不毛ノ地, 時トシテ Eucalyptus (注、Eucalyptus すなわちユーカリであるう), 楊, palmtree, ヲリ

6時 dinner: cafee, pork u. potato, bread, [△]Honey dew melon ニテ 1.40\$ △コロセノハ口色ノ皮ノ下ノ 10cm 許ノ楕円形ノ melon ニテ ヲマシ. (六・15、[欧米日記]この日の条参照。それはほぼB6の白紙一枚に記された装苑の書状で、角封に入れた跡とみられる折り目が残っている)

に見るように、時刻や食事の場所と品目それに値段などを克明に記しているのである（尤も、出費等を細かく記録する傾向は、『日記』のこれ以前の部分、例えば大正八年三・5、8、同九年十・9などにも見られる）。右の日の末尾に

○carノ時速ヲ測ル. (後略)

とあるのも、測定の方法や結果は不明ながら、寺田寅彦が東シナ海で北極星の仰角を測った（『西遊紀行』三・31、それによってその地点の緯度が判る）のを思い出させる。

それら以外の記事では、六・19の

十時半に moving picture から戻った。

女優の身代りを仕組んだものだ。甚だ似たる顔、殺人、飲茶、Liebe. ありふれた excited の種である。然しこれには Emotion を受けた。又自動車をつかふ道化もあった。⁽³⁾

(中略)

Hotel Morrison

○コレカラ日本ガ外的生活上 (又内的ニモ) トラントシツヅアル 都会的生活ノ Model!!!

とか、七・19 にニューヨークからキューバへ向う船メヒコ (Mexico) 号の中で記した

スペイン語のひびきは太鼓又はブリキの一部ヲ押へテチンツカ如キ、geräusch (= noisy), 又ハ舌タレズノ如キ響。(イケ分朝鮮語ニール accent) 分カラズ

あるいはバリ在住中の十一・23の告白

即興詩人をもよむ、数々派流れぬ、これわれの十数年前によみて、その後絶えて読むことあらざりければなり。

(訳者も老ひぬめり、而してこの書によりて青れたるわがわがは思も今やあとなし)

などが注意を引く(なお隅外はこの翌年没)。また特にパリに行つてからは(記事は十一・9から存する)、『École de Berlitz やそれと別に Noël Zouët⁽³⁷⁾にフランス語を習つたり、オペラやコンサートに通いまた寺院や美術館を訪ねたり、あるいは松井(未詳だがフランス語を習っていた仲間)・児島喜久雄・正宗得三郎・田村春吉(医局仲間で、十二・21によれば École de Berlitz に一緒に行つてゐる。その後、名古屋医大学長、戦後は名大総長。注11の冒頭をも参照)・穂積(注、重威)⁽³⁴⁾その他の人々と往来している(十二・7にはそれを「Nihonjinkwai」と称している)などの記事が目を引く。

その辺の記事は実は「大正十年日記」では簡略で、殊に九・17から十一・8までは全く記事を欠いているが、「欧米日記二」によればこの

間に英国に渡つてロンドンで美術館を訪ねたり皮膚病の学者と会つて「支那河南地方の皮膚病に関する原稿を英文にて認め、(中略)同氏に渡」し(十・10)たりしており、十・26以降年末(十二・25、前引)までの記事には、やや長文で内容的に注意される日もある。その一部は「大正十年日記」などによつたらしい後日の記すなわち前掲の分類のDであるが、そのA・Cに属するものも若干あり、中で和田英作と同宿になったこと(十・29、C)などは見逃せない

更に暫くパリに居た後、リヨン・ストラスブルに行き(十一年六～七月)、ケルンを経てベルリンに滞在し(同九～十月)、再びパリからリヨンに行った一年間の「欧米日記二」(Dが多いけれどもA～Cの記事もある)、そしてDの記事が大部分を占めるけれども長文のAをも少からず含む「同三」は、生年記録の「同四」とともに李太郎の留学日記として検討する必要があることは言うまでもないが、すでに紙数が超過したので、他日を期することとする。

注

(1) 周知のように本業は医学者で、専攻は皮膚科(正しくは「皮膚科学」と言うべきであるが、煩しいので、以下臨床の講座名には「学」を省く)。明治四十四年東京帝大医学部卒業後、南満医学堂(後の満洲医大)、愛知医大、東北帝大、東京帝大の教授を歴任して、東大停年直前の昭和二十年十月に病没したが、筆者の父邦三(専攻は生理学、後には遺伝学・衛生学・保健学なども)とは同窓(父の方が十余年後輩)であるばかりでなく、最後には同僚であつた。すなわち父と李太郎(むしろ太田教授)とはほとんど同時(昭和十二年五月)に、父は名古屋医大から、太田教授は東北帝大

から、東大医学部に就任し、八年半の間同じ職場に勤めていたのである。『太田正雄先生（木下李太郎）生誕百年記念会文集』（同会・昭六二）の巻頭図版の中に「太田先生が描いた似顔絵（東大医学部）」という一頁があるが、そこに集められた折々（恐らく教授会の際）のスケッチ一四枚（うち太田教授自身の似顔絵は衛生学の田宮猛雄教授の筆）の中に昭一九・六（原文横書算用数字）と付記した父の斜め横顔もある。なお、愛知医大（県立、昭和六年五月に名古屋医大となり官立に移管）では二人の在任は重ならない（李太郎は大正十五年十月に東北帝大へ転出、父は昭和四年から二年外遊の後六年十月に着任）。

ただ、父は太田教授とは特に親しくはいなかったようで、そしてもちろん職場のことを家庭に洩らすようなことは一切しなかったため、当時小学生で（最後の年に中学に入っていたが、その頃はもう教授も父も自分と家族や教室へ理科系の語で、ほぼ文科系の「学科」もしくは「講座」に当る）の疎開や防空などで手一杯であった李太郎の盛名を知らなかった筆者は、父から彼のことを聞き出すことも思いつかなかった。因みに、父が親しくして筆者（戦争末期には父の当直に伴って東大医学部の父の研究室に折々寝泊りした）も御挨拶したり何度かお会いしたりしたことがあるのは、永井潜（生理学、父の恩師で前任者。李太郎も親しくしていたようで、『日記』にしばしば見える）・颯田琴次（耳鼻科、東京音楽学校にも通ってヴァイオリンを嗜み、音響学者でもあったのは有名。李太郎も親しかったようで、学生時代以来例えば明治四四年五・25、27など『日記』にもたびたび呼び捨てで見える。注16をも参照。兩名誉教授、東龍太郎（薬理学、後の東京都知事）・内村祐之（精神科、鑑三の令息）・小川鼎三（解剖学）・若林勲（生理学）その他の教授、時実利彦助教授（同、お会いしてはいないが、応召中で何度か慰問文を差し上げた）など（順不同）である。これらは私事に属するが、万一筆者の記憶が何かの役に立つこともあればと、この機会に付言するとともに、父と李太郎が東大で同僚であったことは後に原稿用紙の紙質・デザインに関して言及するので、あらかじめここに述べた次第である。

なお、李太郎の三女で末子の寧子（やすこ）さんは筆者の家内と女学校・高校で同級、戦後数年は家内の一家も本郷西片町の母の実家に仮寓し

て家も近く、今も質状を交換する仲であるが、それらのことは本稿には何の関係もない。

(2)

李太郎の出発月日は後述の通り二つの日記（「大正十年日記」と「欧米日記一」）に記されているが、帰朝の日にはそれがない（恐らく取り紛れて、つけなかったであろう）。そして従来年譜（例えば『文藝』昭二〇・一二「太田博士追悼号」に野田宇太郎氏が載せた「太田正雄略年譜」とか新旧『全集』に長男河合正一氏の寄せた「年譜」では九月一日としてきたが、杉山二郎「木下李太郎―ユマニテの系譜―」（平凡社・昭四九）の注（34）が紹介するように、当時の新聞を精査した延広真治氏「名古屋における木下李太郎」（『李太郎記念館シリーズ』四号、昭四七・五）によつて、九月三十日神戸に上陸と考えられるに至っている。妻正子に宛てた八月十三日付書簡（後述『全集』第二十三巻、二四七番）に「（前略）左の如く決定。マルセーユ、八月廿四日出帆鹿島丸」とあつて九月一日帰朝は到底無理と判る上に、Dr. I. Murakami 宛九月廿日付書簡（未発送）でその頃「ボンベエからシンガポールと」航海してきたことが知られる点からも、延広氏の調査結果は信頼できる。

(3)

いずれも『甲南大学紀要文学編』に発表されたもの。以下にはその号数とそれに添えられた年代ならびに奥付の年月を付記する。

1、李太郎『欧米日記』ノート 44（一九八一年）『国文学特集』、昭五七・三三

2、木下李太郎『欧米日記』ノート（続） 48（一九八二年）『国文学特集』、昭五八・三三

(4)

3、ノート、木下李太郎『欧米日記』をめぐって——ヨーロッパまで—— 52（一九八三年）『国文学特集』、昭五九・三三

(5)

この月名はフランス語で、英語 May の誤植ではない。ただ、フランス語ならば月や曜日の名は大文字で始める必要はないのだが、このように大文字としている箇所が『日記』には多い。

この鉛筆書のタイトル Pontan 云々は、『日記』第三巻に収められた『Journal de Pontan 1927-1930』を連想させる。そしてその用紙（M. OTA）の二百字詰原稿用紙とそれを封筒に入れて保存する方式とが『欧米日記』と共通する点から、両者は同じ頃の整理と見てよいであろう。

(6) 右に言及した「大正十年日記」(明らかに当時の日々の記)も、「欧米日記一」と同じ(左下の印刷時期・枚数を示す略記も)、「西片町一〇はノ三太田正雄」宛の改造社の封筒の三方を切って仮表紙にしたものに挟んである。

(7) この部分の用紙貼付状況とその順序を細説すれば、次のごとくである。「ゑはがき」より六・10の記事 この年の冒頭から数えて五枚目の右寄り

六・11 右の後に、同じ用紙に二行空けて記す

六・11 「六」は「七」を抹消して右に書く 六枚目

14 七枚目 (M.OTA の用箋)

12 八枚目 (同右)

(8) 現に令息重行氏が抄出編集した穂積重遠『欧米留学日記(一九二一—一九一六年)——大正一法学者の出發——』(岩波書店・一九九七)は、執筆の姿勢がそもそも「妻あての『家庭通信』である」(重行氏の「まえがき」)が、刊本の本文冒頭に妻宛の書簡が置かれている。

(9) 名は慶蔵、顎軒と号して漢詩文もよくした。皮膚科学専攻で、李太郎の恩師。その功績・人柄の一端は、大正一四—一五年「露国学士院二百年祭典に参列の後」、パリで「国際花柳病予防会議に出席し」(自叙)、その他公務を果たした欧米紀行(「当時治道の汽車中又はホテルに於て認めた感想を、日本の新聞雑誌に寄稿したる切抜の補綴に過ぎない」と自叙に言う)の『乙丑周游记』(私家版、昭二)に寄せた呉秀三・藤浪鑑両碩学と李太郎(太田正雄として)の序(『全集』第十四卷所収)や同じく門下の上林豊明の跋、更には李太郎(同前)が編輯・発行者の代表になっている「顎軒先生追懷文集」(戊戌会・昭二)の諸家の文に詳しく(李太郎の「我々の医局に在りし日の土肥先生」は『全集』第十六卷所収)、李太郎にはまた「土肥先生と癩史及び梅毒史」(『全集』第十四卷所収、初出は「体性」昭七・二の由)もある。

(10) 妻正子宛書簡(大正十一年一月十五日付、パリより、『全集』書簡番号一九六)に「俺が御許の御両親に洋行の資を仰いだのは」(「た」の濁点、今補う)とあり、長兄賢治郎宛書簡(同年三・24付、パリより、番号一九九、但し『全集』には「未発送」とある)に「個人の自費留学としては」

の語もあって、晩年の李太郎に近侍した野田宇太郎氏の「木下李太郎の生涯と藝術」(平凡社・一九八〇)には「大正十年に彼は自費による欧米留学の旅に発った」(二二頁)とのみあるが、前記杉山氏著書には「妻正子の実家河合家から費用を借用しての私費留学であった」(二二五頁)とある。

しかし一方で、彼の洋行直前にか、銀座で「偶然出会った」児島喜久雄の回想(「太田君の雑然たる思ひ出」、『文藝』昭二〇・一二「太田博士追悼号」)に、「行くとなつたら新聞社が無闇に金を呉れるので困つて居るやうなことも言つて居た」ともあり、また留学の初年度(大正十年)は夫人正子もしくはその父河合浩藏宛の送金の依頼や感謝の書簡がいくつかある(書簡番号一九〇・一九一・一九三—一九五)が、二年目になると正子の信仰(天理教)の問題などからやや懸隔を生じ(書簡一九六・一九七、もちろん決定的ではない)、「お互の誤解や、お互の勘違ひを防ぐために今後河合家からの送金は中止して貰はう」(三・14付正子宛書簡一九七)と言ひ出し、代つて長兄よりの送金を受けている(前記書簡一九九)。

ついにながら、筆者は学生時代(野田宇太郎氏が案内した東京文学散步の会)から成城大学(野田氏を非常勤講師に委嘱していた)在任中にかけて野田氏の知己を得、同氏が「藝」の略字に「芸」を用いるのを極度に嫌つたことを知っているので、ここでも注2の「文藝」でも、氏の用字を尊重した。

(11) 前引十一・26の記で東京駅の次に立寄つたらしい「古宇田」は皮膚科医局の友人(後出の田村春吉と共に李太郎より少し先輩)で名は微太郎。もちろん注9に挙げた『顎軒先生追懷文集』に田村と共に寄稿している。「日記」にこれ以前にもたびたび見え、翌日李太郎と同船で渡米して、六・9シアトルでNew Washington Hotelに投宿したのは「緒であったが、同・28(ポストン)に「古宇田君二別ル」とある(『欧米日記一』に「古宇田君と別る」と転記している)。しかし七・12(ニューヨーク)に「古宇田君ト食事」(『欧米日記二』ではこれより前の七・5(ニューヨーク初日)に「古宇田君と同宿」とある)、翌日には「古宇田君ヲ送りテユク」とあり(『欧米日記二』七・14に「今日古宇田君がたつので(後略)」とあるが、その日付の下に「十三日(?)」と記す)、『木下李太郎宛知友書簡集』に収めた書簡によればその後ブラジルに行き(因みに、当時堀口大学の父が公

使で、太学も首都リオ・デ・ジャネイロに滞在していたことは、『知友書簡集』二七二の彼の書簡からも判る、翌大正十一年夏にはフランスに渡って『知友書簡集』二九五の長沼重隆書状に「五月のはじめごろ南米から古宇田さんがお見えになった筈」とある、『日記』六・26には「昨日ストラスブールに着、／帰途ナンシイ／（廿七日明后日ナンシイを経て帰巴）古宇田氏と一緒に」とある。その後バリ、リヨンなどに居た李太郎と何度か文通あるいは会談して、その年十一月マルセーユから香取丸で帰国した。独文学者の吹田順助と同船であった。吹田の自伝『旅人の夜の歌』（講談社・昭三四）の「二三、留学時代——イタリヤ、ロンドン、パリ」「二四、留学よりの帰航、帰国、関東大震災——地方生活の回顧」に彼の名も見え、特に「二三」の末尾直前には「十八日マルセーユ着。（中略）N・Y・K代理店ではからずも古宇田君に会えてうれしかった。午後三時、同君と香取丸に乗船。／十九日古宇田君たちとちよつと船を下りてマルセーユの町をぶらつく。スペイン・シネマをみた」とある。

なお『日記』には右にも引いたように初めは呼び捨てだが途中からは「君」づけが多く、またローマ字ではKoda（「大正十年日記」六・14）、Koda（同・同・14）、Koda（同・同・23）とあるが、いずれにしても「コーダ」と発音していたものと判る。『東京帝国大学医科大学／並 同学医学部卒業生（この二行は小字角書氏名録 昭和十三年）（東大医学部同窓会名簿『鉄門倶楽部氏名録』の前身）によれば、当時は東京で開業していたようである。

(12) 長兄賢治郎が郷里に戻って（明治三十九年）家業を継いでからは、三男正雄は東京で次兄円三宅を言わば実家のようにしていたらしく、白山御殿町に居を構えた経緯等は賢治郎の「弟正雄行状記」（旧版『全集』附録第十二号、昭二六・一〇）に見え、またこの兄（円三）の人柄・業績（帝都復興院土木局長から内務省復興局土木部長 などについては、注10所掲野田氏著書に収めた「兄太田圓三と木下李太郎」（初発表は『成城文芸』第四号、昭三〇・六）や太田慶太郎氏（賢治郎の長男）の「米惣・太田家の歴史」（『李太郎記念館シリーズ』十三号、一九八二）に詳しい。因みにこの頃、李太郎は岳父河合浩蔵の神田三崎町（現、千代田区西神田・三崎町の辺）の家に寄寓していた。

(13) 注1に挙げた永井潜。李太郎よりは八／九年前輩だが親しかったらしく、『日記』に折々名が見える。

(14) 名は大定。東洋（特に中国）仏教の泰斗。当時は東大印哲（印度哲学梵文学科の略称）の講師か。大正十五年教授。『日記』にはその名は見えないようであるが、奉天時代（大正五／一〇年）の大陸調査旅行の成果として既に『大同石仏寺』（木村莊八と共著で日本美術学院・大一一刊）の稿をなしていた李太郎は、何度か会って情報・知識を交換していたに相違ない。また常盤が次注の関野と共に編んだ『支那仏教史蹟』（扉題、背文字は「支那仏教史蹟評解一／五」目次題は「支那仏教史蹟（集評解）五冊（仏教史蹟研究会・大一一／昭三）の一部にも、あるいは彼の貢献があったかも知れない。

(15) 名は貞。当時工学部教授。日本建築史学者としてよく知られているが、李太郎はこの年三月十日「午后和辻及び木村（注、莊八であろう）」と工科へ関野博士を尋ね印度毘多（注、グプタ）彫刻の写真にinspireせらる」とあり（和辻宛書簡一六二・一六三参照）、その折の質問に答えてであろうか、同・13には「午前九時半関野貞博士訪問せらる」とある。前注をも参照。

(16) もちろん哲郎であるが、李太郎は彼とは特に親しかった。明治四十四年（学生時代最後の年）以降の彼宛の書状（葉書を含む）が『全集』に多数見え、日記にもその頃からたびたび見える。特に同年二・20の「和泉屋染物店、家にてはやかましき故和辻の下宿にゆき作る」（原文横書、以下も同じ）や同年五・26の「和辻読売に何かかいてある。予の名も出しあたり」などは注意され、翌27には「（前略）颯田に会ふ。彼今日初めて音楽学校でOrchestraのViolinをひくなり。仕方がなくききにゆく。和辻居たり」という、面白い記事もある。昭和十二年五月東北大から東大に転任になった李太郎は、本郷西片町の和辻の旧宅（和辻は当時の板橋区練馬南町、今の練馬区桜台に新居を構えていた）を譲り受けて、そこを最後の住みかとしたのであった。

(17) この記事は違うが、翌日以後「夜ハ大谷光瑞氏ノ話ヲ聴ク」（五・28、この次にそのメモを続ける）、「午前中大谷氏の話をきく」（同・30）などであり、船内では連日氏の法話があったようである。「大谷さんは今夜は茶話会

の話で不機嫌に見えた(後略)」とあるのも、聴衆が静粛でなかったため気に障ったのではあるまいか。一方、「夜 avec Otani fiber Speise」(仏独混合だが、食事中大谷氏と語り合った、の意か)とか「夜 Mr. Otani と話した。／山西省に一独立国を肇むること。／忠君愛国のこと。／音楽ニ対スル仏ノ態度」(原文横書で、改行を斜線で示す)、あるいは「Mr. Otani は Oak の Gattungname (注、分類学上の属名) を知つてゐた」(六・四) などとあり、船内で特に親しくしていたようである。

(18) 李太郎らの乗った諏訪丸の入港について、後に引く「大正十年日記」の「Victoria ノ岬見ユ」などから川口氏(前記論攷一)は「ヴィクトリアに着いたようにも思われるが」と言い、氏の言うように杉山氏(前記著書)もその理解と見られるが、日記のその後の部分(それに補助的には注21にもふれる「北米通信」も)を読めば、川口氏推測の通りヴァンクーヴァーに上陸し、それから汽車でシアトルへ向つたものと思われる。ヴィクトリアの岬を左に見て、航路を左(北)に取ればヴァンクーヴァー、右(南)すればシアトルである。

(19) 与謝野晶子に宛てた消息の形の「諏訪丸にて」(『全集』第十一巻所収、初発表は『大阪毎日日曜附録』第一年第三十三号、大正一〇・八・一四の由に「牡丹燈記」の始めの方を翻訳しました」とあるのは前者に対応するかと思われ、すでに杉山氏は前記書で

アメリカへ向う途中、客船諏訪丸のなかで、中国文化研究の余燼がくすぶつていて、「牡丹燈記」などを訳し、やがて七月二十日、精華書院の児童文学文庫の一冊、「支那伝説集」をまとめている。(後略、二二六頁)

と指摘している。『日記』公刊以前の考証で、「諏訪丸にて」や「支那伝説集」の序によつたのであろう。なお「大正十年日記」には、これに先立ち「牡丹燈記 et sa version en français (= and its translation in French) をよむ」(一・六)、「劉刺史奇夢ヲ訳ス(中略)再ビ翻訳ラツツケル」(三・26)、「夜二時マデ聊齋ヲ訳ス」(四・20)といった記事もある。

(20) これも私事ながら、筆者の父もそうであつた。これはあながち、二人の実兄の一人(川村清二)が植物(とりわけ専門は菌類)分類学、もう一人(同多実二)が動物生態学(それを日本に輸入して京大で講じた)にたずさ

わつていたからでもあるまい。それに文科系の学者でも小宮豊隆などはイタリアでその松の形状に注目して日記にも書いていること、別稿(「文学者の留学日記大正篇——阿部次郎(続篇)と小宮豊隆——」)、「(ICU)人文科学研究」第二八号、一九九七・三にふれた通りであつて、総じて動植物学分野で分類学がまだ全盛であり、中学の教科に「博物」があつて、実地の「観察」が要求もされ可能でもあつた時代の影響も見られるように思う。

(21) 「北米通信」(『全集』第十四巻、初出は「亜米利加旅行の日記から」上下・補遺などと題して『冬柏』昭五・五〇八)と「大正十年日記」のこの前後とを比べると、前者は都市ごとに当時の日付を付記し書簡の文体を用いて、いかにも現地での筆らしく見せているが、実際は後者などによって寄稿直前に書かれたものであること疑ない。「後記」が指摘する通り「日記」の昭和五年三月十六日に「アメリカの日記少しかく」とあり、また同廿一日に「アメリカのこと調べ」とあるのが、これに関連すると思われる。

(22) この年十一・20(パリ時代)の記事には、
(前略)午后女教師と三人にて出でて活動写真を見る。Chaplin と近世風になほしたる Condition (= Cinderella) なり。王子の代りに若き米国の分限者を用ゐたり。
というのがある。

(23) 当時パリに居た詩人だが、大正十五年来日し、旧制静岡高校、東京外語、東大、早大等で仏語仏文学を講じる傍ら、『東京シルエット』(法大出版局・昭二九)『東京誕生記』(朝日新聞社・昭三〇)などの随筆をも著し、当時はよく知られたフランス人であつた(『日本近代文学大事典』と筆者の記憶とによる)。

(24) シゲタカ。明治の憲法学者八束(民法学者陳重の弟)の長男で、民法学者で東宮大夫でもあつた重遠の従弟。重遠の末女若佐美代子氏の示唆によつて見当をつけることができ、『大正人名辞典Ⅲ』(日本図書センター・一九九四)『実業の世界社・昭和五年刊行の『明治大正史』第拾五巻(人物篇)の復刻版』を検すると、「(前略)大正(中略)七年東京帝国大学法科大学法律科を卒業、翌年法律学研究のため欧米に遊び留学する事五年、十二年帰朝(後略)」とあつて、年代も合う(尤も、明治二六・昭和三四とい

う生没年などは『著作権台帳』にも出ている）。ローマ字では M. Hosumi
〔大正十年日記〕 十二・25）とも M^r et M^{rs} Hosoumi 〔「欧米日記」 十一・
3）ともあるが、どちらの綴りでもフランス語式にホズミと訓むのである。

（付記） 本稿を草するに当たっても、多くの方のお世話になった。特に空太郎日
記の原本の閲覧・調査については神奈川県立近代文学館とその係の方に何
度もお手数をわずらわし、注 11 に記した東大医学部の古い卒業生名簿の閲
覧については同大学医学部中央図書館の係の方に、また注 9 に挙げた『顎
軒先生追懷文集』は学術情報センターのデータベースによって成蹊大学高
柳文庫に蔵せられることを知り、閲覧を願い出て（たまたま本年度出講し
ていて好都合であったが）許され、いずれも能率的に調査することができ
た。更に注 24 に記した穂積重威氏については、御一族と推察して不躰にも
電話でお尋ねした岩佐美代子氏から有益な御示唆を賜ったお蔭で、突きと
める事ができた。ここに記して、あつく御礼申し上げる。